

豊沢遺跡第7次発掘調査報告書

平成26年(2014年)

姫路市教育委員会

序

姫路市内には約1,200箇所の遺跡が存在し、私たちの祖先の暮らしや文化を今に伝えています。姫路市教育委員会では、これらの遺跡を保護し未来に継承するため、発掘調査を進めるとともに、現地説明会や企画展を通じて、その成果を市民の皆様に広く周知するよう努めています。

今回の豊沢遺跡の発掘調査では、弥生時代の竪穴建物跡など生活遺構が発見され、本遺跡の様相を解明する上で新たな見を得ることができました。ここに調査成果を取りまとめ、ご報告いたします。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成27年（2015年）3月

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

目次

序・例言・凡例	1
第1章 調査に至る経緯と調査地の位置	2
第2章 調査の成果	3
第3章 審察 「豊沢遺跡第7次発掘調査 SK32 烧土の考古地磁気年代」	6
図版	8
写真図版	14

例言

1. 本書は、兵庫県姫路市豊沢町23番に所在する豊沢遺跡（遺跡番号：020457）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査（調査番号：20130590）は、姫路市埋蔵文化財センター南憲和、小柴治子が担当した。確認調査（調査番号：20130082）は、黒田祐介が担当した。
3. 整理作業及び報告書の作成には、以下の職員の協力を得た。
黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代
4. 本書の執筆にあたり、第1章・第2章（遺構）・写真撮影を南、その他を小柴が担当し、第3章は兵庫県立大学防災教育センター森永速男氏より玉稿を賜った。編集は小柴が行った。
5. 発掘調査・報告書作成に際し、下記の方々・機関にご協力・ご教示を賜った。（敬称略・五十音順）
早柏敏和 森岡秀人 森永速男 有限会社松浦興業

凡例

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面水準（T.P.）を基準とした。また、図1は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「姫路南部」、図2は姫路市基本地形図を使用した。
2. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
3. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP 土坑→SK 溝→SD 竪穴建物跡→SI 性格不明遺構→SX
4. 本報告書に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置

1 調査に至る経緯

姫路市豊沢町23番において、集合住宅の建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、近接して豊沢遺跡（県遺跡番号：020457）が存在するため、平成25年（2013年）5月30日に試掘調査（第6次調査：調査番号20130082）を実施した。その結果、包蔵地の範囲が想定より南に広がることが判明し、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更手続きを行った。その後、事業者と協議を重ねたが、建設計画の変更是困難との結論に至り、本発掘調査（第7次調査：調査番号20130590）を実施することとなった。調査期間は平成26年3月18日～4月24日で、調査面積は105.76m²である。現地調査終了後、出土品等の整理作業を開始し、本書の刊行をもって事業を完了した。

2 調査地の位置と既往調査

姫路平野は播磨高原から中国山地に水源をもつ数条の河川が形成した沖積平野で、中でも市川によって形成された扇状地・三角州が姫路市内の中心部を占める。豊沢遺跡は姫路平野の中央部に位置し、JR姫路駅の約300m南方に所在する兵庫県播磨高等学校を中心とした一帯が周知の遺跡範囲とされる。

周辺には多数の遺跡が点在し、縄文時代の遺跡には、東方約300mに所在する北条遺跡と北東約1kmに所在する千代田遺跡がある。前者からは縄文時代後期初頭の土器が出土しており、後者からは縄文時代後期前半の深鉢が出土したとされる。弥生時代に入ると遺跡数は増加し、千代田遺跡では前期から中期の土器が出土している。また、豊沢遺跡の西方約1kmに位置する手柄山と船場川流域は、小山遺跡、畠田遺跡など弥生時代中期から古墳時代前期の遺跡が集中している地域である。

豊沢遺跡は大正年間に貨泉や弥生土器が出土し、弥生時代の遺跡として周知されていた。姫路市による調査は平成22年に開始された。このうち、遺跡の北西で実施した第2次調査において微高地の落ちがみつかり、遺跡の範囲が一部確定するとともに、微高地上の溝から弥生時代中期後半の土器がまとまって出土した。また、兵庫県播磨高等学校の敷地内を調査した第4次調査では、弥生時代中期前葉の土坑、中期後半の竪穴建物跡、庄内式併行期から布留式併行期の竪穴建物跡・土坑を検出し、豊沢遺跡の存続時期、遺跡の性格などが解明されつつある。

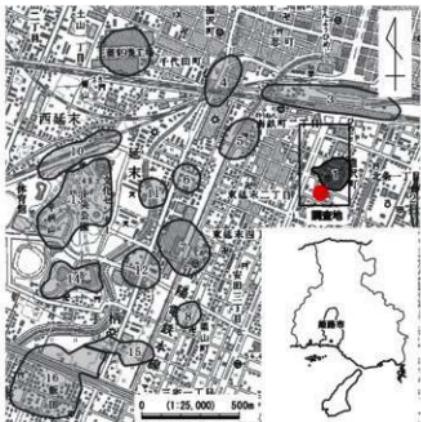


図1 周辺の弥生時代の遺跡



図2 調査区位置図

第2章 調査の成果

1 調査の概要

基本層序は、現地表から下層に向かって約50cmの盛土、約10cmの耕土、約5cmのにぶい黄色シルト、約20~35cmの黒褐色シルト、黄橙色シルト質粘土（基盤層）である。基盤層の検出レベルは、調査区西端で8.95m、東端では9.05mで、基本的には基盤層上面で遺構検出を行い、弥生時代中期～古墳時代初頭の堅穴建物跡4棟、溝18条、土坑39基、性格不明遺構3基のほか、柱穴133基を確認した。このほか、黒褐色シルト上面では灰黄色シルトの埋土をもつピットを13基検出し、このうち1基からは中世の須恵器甕が出土した。この層は、詳細な堆積時期は不明であるが、ブロック状の黄色土（基盤層）や炭片、焼土および弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を多量に包含しており、磨製石庖丁、流水文土器、鉱物津などが出土している。

2 遺構・遺物

弥生時代～古墳時代の遺構は、遺構間の先後関係及び遺物から弥生時代中期と古墳時代初頭に区分できるものがある。SI2, SI4, SK1, SK32, SK35, SK37は弥生時代中期、SX1, SI1, SK2, SK3, SK36は古墳時代初頭に属すと考えられる。その他の遺構は、遺物が細片、もしくは上層の黒褐色シルトと遺構埋土の分層が困難で、遺物と遺構の共伴関係が疑わしいため、遺構の時期を含めた詳細は検討を要する。

以下、主要な遺構について記述する。

(1) 弥生時代中期の遺構・遺物

SI2（図版1, 写真図版1）

SK35, SK37を切り、SI1, SK1~4, SK7, SK21, SD1に切られる。平面プランは直径約5.6mの円形とみられ、南半は調査区外へ続く。周壁溝は二重で検出されたが、断面観察で埋土に切り合はない、床面を拡張もしくは位置を少しずらして建替えが行われた可能性も考えられる。主柱穴は3基を確認した（SP123, SP35, SP42）。これらは床面から底まで50~70cmを測り、いずれも根石をもつ。貼床は認められなかつたが、床面の中央付近は基盤層が細砂を含み硬化していた。遺構の時期は、SK1に切られていることから、弥生時代中期後半（IV-3~4）以前と考えられる。出土遺物は最も古いものでII期の逆L口縁甕が1点確認できるが、主体となるのはIV期の土器である。

SI4（図版2・6, 写真図版1）

SK32を切り、SK19, SK21に切られる。東西2.3m、南北1.6m以上の方形ないし長方形を呈し、南半は調査区外へ続く。壁際に掘方を持つ周壁溝が巡り、調査区南壁付近では直径約25cmの範囲で床面が被熱して焼土化し赤く変色していた。主柱穴は検出されておらず、調査区外に2基、もしくは主柱穴を持たない構造が推測される。また、SP116は、埋土の状況から○（いちまる）型中央土坑の○土坑の可能性も考えられる。土器がまとまって出土したが、床面からわずかに遊離しており、廃絶時に遺棄されたとみられる。出土遺物は、広口長頸壺、く字状口縁甕、高杯である（図13-17~19）。広口長頸壺は、口縁部と頸部に回線を巡らせ、口縁部には棒状浮文を施文する。高杯は脚部のみで、直線文および鋸歯文は、鋭利な工具で施文されている。遺物の時期は弥生時代中期後半（IV-3~4）と考えられる。

SK1（図版1・3・5, 写真図版1）

S12を切る。長軸1.4m、短軸1.0mの不定形を呈す土坑で、深さは30cmを測る。埋土の中位から下位にかけて土器群が一括廃棄された状態で出土した。出土遺物は、く字状口縁甕、大型広口太頸壺、広口長頸壺、直口壺、受口壺、無頸壺、高杯などである（図12-1~15）。く字状口縁甕は大きさが2~3

種類みられた。大型広口太頸壺は、口縁は無文で頸部に指頭圧痕を伴う粘土帯を施文する。壺は出土量が多く、全体の半数以上を占める。中でも直口壺と受口壺の割合が多く、壺全体の8割を超える。これらには、口縁に片口がある個体を数点確認した。壺の文様は、凹線文が主流であるが、頸部に指頭圧痕もしくは列点文を伴う粘土帯を施す例もみられた。また広口長頸壺のうち1点は、口縁部外面には列点文、内面には扇形文、体部には櫛描波状文と直線文を施していた。高杯は、水平口縁と楕形が出土している。遺物の時期は器形や文様の構成から、弥生時代中期後半(IV-3~4)と考えられる。

SK32 (図版2・3,写真図版1)

SI4に切られる。北側の長径約60cm、短径約40cmの梢円形を呈する掘り込みと、南側の長径50cmのほぼ円形の掘り込みが隣接しており、深さは共に5cm程度である。穴の周囲には地山を削り出して幅5~10cm、高さ5cm程度の土手を構築し、隣接部分では土手を共有していた。埋土の断面観察では2基に切り合いは認められず、一連の遺構と判断した。SK32の壁面は全体的に被熱して2~3cmの厚さで焼土化しており、底部は灰赤色に、土手は明赤褐色に変色していた。また、土坑の周辺は、東西約2.2m、南北約1.2m、深さ5~10cmの範囲で基盤層が灰黄褐色に変色していた。このほか、北側の掘り込みでは埋土上面でも被熱した範囲があり、土坑全体に一度地山質土を客土し、再利用した可能性が考えられる。出土遺物は土器の細片のみで詳細は不明であるが、第3章で残留磁化測定により西暦50~100年という分析結果が出されており、今後遺構の性格を含め詳細な検討を要する。

SX35 (図版1,写真図版1)

SI1, SI2, SK2, SK3, SK39に切られている。幅1.7m、長さ2.0m以上、深さ60cmを測る。埋土には焼土塊や炭などが多く含まれていた。遺構の時期は、SI2に切られていることから、弥生時代中期後半(IV-3~4)以前である。出土遺物は、広口長頸壺の口縁部が土坑の床面付近から1点出土した。口縁内面に2列の突帶を施す。遺物の時期は弥生時代中期前半(III-2~IV-2)があてられる。

(2) 古墳時代初頭の遺構・遺物

SX1 (図版1)

SI1の埋土上面で検出された土器集積遺構である。平面プランは不明瞭であるが、SI1の|○(いちまる)型中央土坑上層付近に遺物が集中している。SI1の埋土との境界にわずかに粗砂を含むが、上層の堆積土の土圧でSI1の埋土にめり込んでいる土器があり、断面プランもやはり不明瞭である。検出状況などから、SI1の廃絶に伴う遺構である可能性も想定される。出土遺物は、タタキ甕、ハケ甕、有稜高杯、二重口縁壺、有孔鉢、鉢などがある(図13-20~29)。このほか、広口壺、讃岐窪の土器とみられる細片と、讃岐様の胎土で作られたタタキ甕の破片が認められた。遺物のうちタタキ甕は器高が、約26cm、22cm、15cm、有稜高杯は脚部の高さが約13cm、9cm、7cmとほぼ3種類の大きさに分類できる。出土量もこの2器種が全体の8割程度を占め、特徴的である。ハケ甕は、淡路産に分類される形態とみられるが、搬入品か模倣品かは不明である。遺物の時期は、有稜高杯の形状や二重口縁壺の文様構成などから、古墳時代初頭(庄内式期)に相当すると考える。

SII (図版1・3,写真図版1)

SIIを切り、SX1, SK36, SK39に切られる。南北5.5m以上、東西3.8m以上の方形を呈し、北西側は調査区外へ続く。内部構造は平面での認識が困難であったが、断面観察等により、周壁に沿って盛土により高床部が構築されていることを確認した。規模は、幅1.0~1.3m、中央床面からの高さ10cm程度を測る。また、床面全体に貼床が認められ、中央部では、梢円形と円形の2基の土坑がセットに

なったいわゆる〇(いちまる)型中央土坑を検出した。土坑の周囲に高さ2~5cm程度の土手を築くタイプで、楕円形の〇(いち)土坑は長軸1.1m以上、短軸約0.7mで、深さ10cmを測る。土坑全体に薄く炭が堆積し、埋土にも多く炭が混じり黒色である。円形の〇(まる)土坑は、上部が南北70cm、東西50cmの方形、下部は径約40cmの円形で、床面から底部まで80cmを測る。また、〇(まる)土坑の北側に接して小磚と土器細片で充填された深さ約30cmの小ピットを検出した。主柱穴は2基を検出し(SP20, SP124)、このうちSP124には根石が据えられていた。床面からの深さはともに約50cmを測る。遺構の時期は、貼床の埋土から底部が尖底化した甕の小片が出土していること、上層のSX1の時期が古墳時代初頭(庄内式期)であることから、古墳時代初頭(庄内式期)と推測する。

(3) その他の遺構

SI3 (図版1)

SK8を切り、SK5に切られる。検出したのは、東西3.0m、南北0.9mの範囲で、大半は北側調査区外へ続く。平面プランは方形または長方形とみられ、床面は貼床が認められた。また、壁際に周溝はなく、直径10~15cmの柱穴列を検出した。遺物は、弥生時代中期(IV)のく字状口縁甕が出土した。

SD6~18 (図版2、写真図版1)

溝の幅は全て10~15cm前後、検出面からの深さは一定ではないが、溝内からは直径10cm前後の柱穴を複数検出した。これらの溝は形状から、建物の周壁溝の可能性が考えられる。調査区南東付近で特に集中して検出されており、複数のグループ分けが推定できる。仮にSD11とSD8が同一の遺構だとすると、東西2.0m、南北1.9m以上の長方形プランの遺構となるが、切り合いが乏しく併存関係の証明は困難である。遺物は細片が少量出土したのみで、遺構の詳細な時期は不明である。

SP48, 52, 54, 69, 88, 89, 119, 120, 125, 126, 131, 132, 133 (図版2・3、写真図版1)

これら13基の柱穴は、掘削底が遺構検出面から65~90cmを測り、竪穴建物跡の主柱穴を除いた他の柱穴と掘方の深さが異なっている。仮に全てが同時併存の遺構だと仮定すると、南北方向に主軸がほぼ平行する3条の柱穴列を成す。各列を構成するのは、西列の南からSP131, SP132, SP133, SP69、中央列の南からSP88, SP48, SP125, SP126, SP89、東列の南からSP54, SP52, SP119, SP120である。柱間隔は、西列と東列が50cm、中央列は48cmとやや狭く、西列ではSP132, SP133の間が1.0m、中央列では、SP88, SP48の間が80cmを測る。列の間隔は、西と中央が約1.6m、中央と東は、約3.2mである。13基の柱穴が同一の遺構であるなら、高い壁のような遺構、もしくは高床建物などが想定できるが、柱穴同士は切り合いがなく、併存関係の証明は困難である。また、出土遺物は細片のみで遺構の時期を明確に示すものなく、遺構の時期、性格を含めた詳細な検討を要する。

SD3, 4 (図版2、写真図版1)

幅25cm、深さ20~40cmを測り、1.8mの間隔を空けて南北方向に主軸がほぼ平行している。SD3はSK11に、SD4はSD2に切られ、北側は調査区外へ続く。遺構検出時には確認できなかったが、掘り下げ途中で直径15cm前後の柱穴を不定間隔で検出した。検出状況から、布振りの柱列が想定されるが、遺構の時期、2条の関係性、遺構の性格についての詳細は明らかにできなかつた。

(参考文献)

- (1) 長友朋子・田中元浩 2007『3.西播磨地域の土器編年』『弥生土器集成と編年・播磨編・』大手前大学史学研究所
 - (2) 多賀茂治 1996『玉津田中遺跡の竪穴住居について』『玉津田中遺跡第6分冊』兵庫県教育委員会
 - (3) 川島・立岡遺跡調査報告書刊行会編 1971『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会
 - (4) 岸本道昭 1995『美久山・前地遺跡』龍野市教育委員会
- ※ 土器の器種分類および時期区分については、(1)に準拠した
※ 竪穴建物跡の〇(いちまる)型中央土坑の名称及び定義は(2)に準拠した

第3章 考察 「豊沢遺跡第7次発掘調査 SK32 焼土の考古地磁気年代」

兵庫県立大学 防災教育センター

森永速男

1 はじめに

土壤中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶが、磁気的には不安定な場合が多く、過去の磁場記録としての信頼性は低い。堆積後に、土壤が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火など）で熱を受けると、土壤中の磁性鉱物は化学的に変化し（主に水酸化物から酸化物に）、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういう過程を経て、土壤は堆積時よりもかなり大きい強度でより安定な残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる。その残留磁化の方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壤が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つようになることを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、西日本における過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した考古地磁気標準曲線が作成されている^{①-④}。この曲線と年代のわからぬ焼土の記録した残留磁化（被熱時の磁場）方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。

ここでは、豊沢遺跡の第7次発掘で検出された遺構SK32の焼土を採取し、それらの残留磁化方向から考古地磁気年代を推定した。その結果を報告する。

2 試料採取と磁化測定

遺構SK32から計10個の焼土試料を、磁気コンパスを用いて定方位で、約7cm³のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取した。残留磁化測定にはスピナーマ力計を、磁化的安定性の検討と二次的な磁化の除去には交流消磁法を用いた。まず、2個のバイロット試料を用いて30mTまでの段階交流磁場消磁を実施し、残留磁化の安定性を検討し、また二次磁化（粘性残留磁化、被熱後に着磁したノイズ）が除去される交流磁場レベルを決定した。さらに、決定された最適磁場レベルで残りの試料を消磁し、その処理前後（消磁前後）の残留磁化を測定した。

3 磁化測定結果および考察

段階交流消磁実験の結果、2つのバイロット試料は磁気的に安定な残留磁化を持っていることがわかった。また、それらの試料には6mTの交流磁場で消磁できる、わずかな二次磁化成分が認められた。このことから、残り試料を6mTの磁場レベルで消磁した。

交流消磁前後の各試料の残留磁化強度及び方向（偏角と伏角）を磁化測定により求め、それらの平均値を計算した。計算結果は以下の通りである。図3に示してあるように、交流消磁後の各試料（10個）の残留磁化方向が良くまとまっていることがわかる。

自然残留磁化（交流消磁前）：平均； 偏角 = -16.9°、伏角 = 47.9° ($k = 25.8$ 、 $\alpha_{95} = 9.7^\circ$)

6mTでの交流消磁後：平均；偏角 = -14.5°、伏角 = 43.4° ($k = 217.0$ 、 $\alpha_{95} = 3.3^\circ$)

k は信頼度パラメータで大きいほど、 α_{95} は 95% の信頼度限界で小さいほど、平均方向の集中度すなわち信頼性が高いことを示している。このように、交流消磁後の平均方向の集中度はかなり高く、また、段階交流消磁の結果からも交流消磁によりノイズである二次的な磁化が取り除けていることがわかった。

4 考古地磁気年代

焼土の交流消磁後の平均残留磁化方向：偏角 = -14.5° 、伏角 = 43.4° ($k = 217.0$ 、 $\alpha_{95} = 3.3^\circ$) と標準的な考古地磁気曲線^[1,2]との比較を図 4 に示す。95% の信頼円 (α_{95} 、95% の確率で真の値が含まれる範囲) と標準曲線の重なりから対応を検討すると、考古地磁気学的には西暦 900 年頃と西暦 1~50 年という年代が得られる。出土土器から弥生中期と考えられていることを考慮すると、後者の年代がもっともらしい年代となる。この図には、同時期の遺跡と考えられている五斗長垣内遺跡^[5]と会下山遺跡^[6]で検出された焼土の平均残留磁化方向も同時に示した。この図から、考古地磁気年代は、前者では西暦 300 年頃、後者では西暦 50~100 年頃となり、豊沢遺跡はこれらの遺跡よりもより古い時代の遺跡と考えられる。

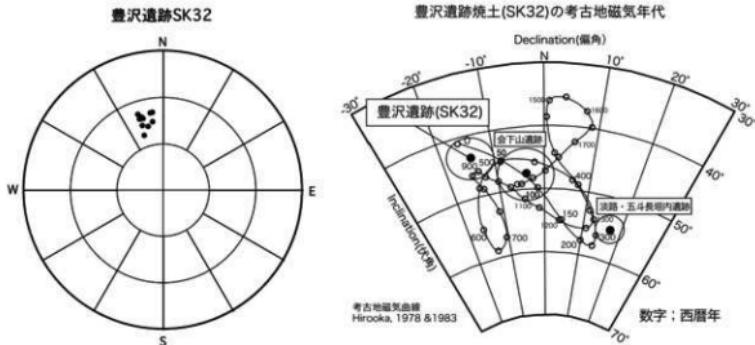


図 3 遺構 SK32 の焼土試料 10 個の、6mT の交流消磁後の残留磁化方向 (●)。

図 4 遺構 SK32 の焼土試料から求めた平均残留磁化方向 (●と梢円) と地球磁場方向の標準的な変化曲線^[1,2]との比較。

（参考文献）

- (1) Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ. Ser. Geol. Mineral.*, 38, 167-207.
- (2) Hirooka, K., 1983. Results from Japan, in *Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments*, eds. Creer, K. M. et al., 150-157, Elsevier, Amsterdam.
- (3) Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, *Rock Mag. Paleogeophys.*, 17, 21-25.
- (4) Shibuya, H., 1980. Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism, 大阪大学基礎工学部修士論文, 54pp.
- (5) 森永達男, 2011. 第 VI 章 分析 1. 五斗長垣内遺跡内で検出された焼土の起源・状態と考古地磁気年代、淡路市埋蔵文化財調査報告書第 8 集「五斗長垣内遺跡発掘調査報告書-経営當育成基盤整備事業 五斗長地区に伴う発掘調査報告書」、淡路市教育委員会編, 149-154.
- (6) 森永達男, 2010. 第 8 章 自然科学分析 第 1 節「会下山遺跡内で選出された焼土の起源と考古地磁気年代」、芦屋市文化財調査報告書第 85 集「兵庫県芦屋市会下山遺跡確認調査報告書-遺跡分布範囲の確認を目的とした第 8~10 次発掘調査の成果」、芦屋市教育委員会、83-89.

図版 1

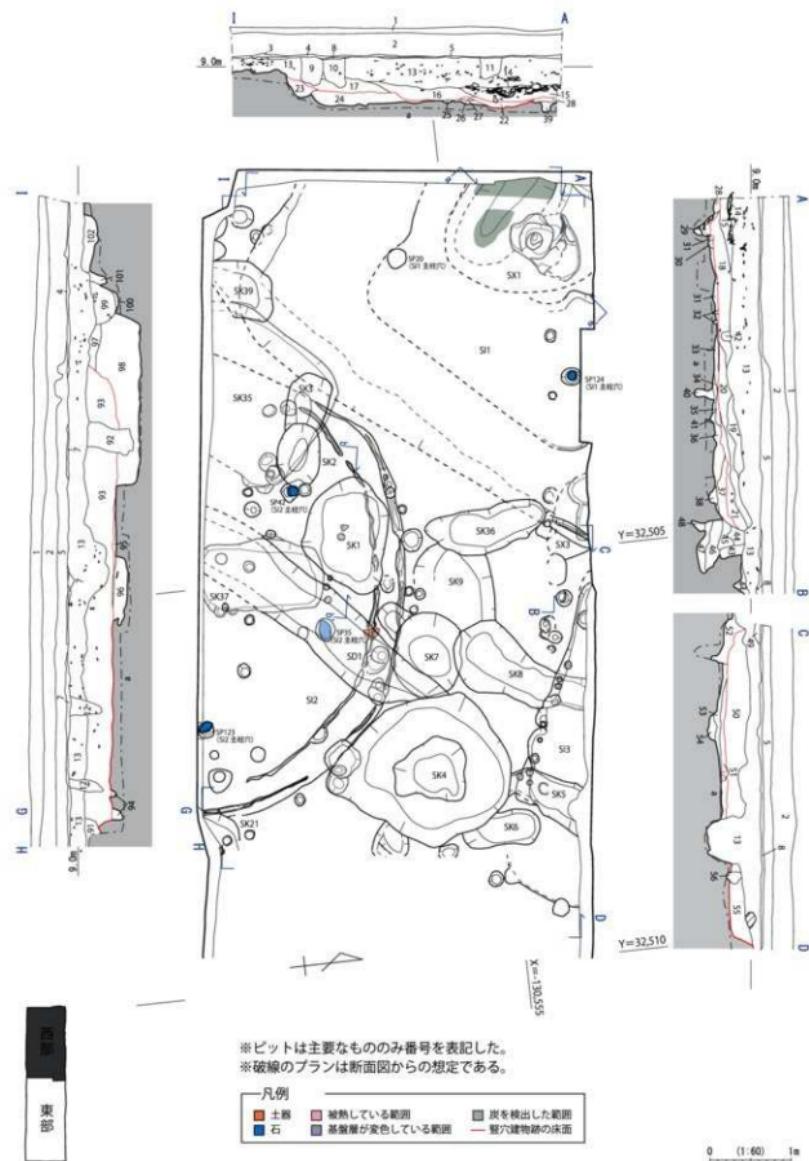


図 5 調査区平・断面図（西部）\\$=1:60

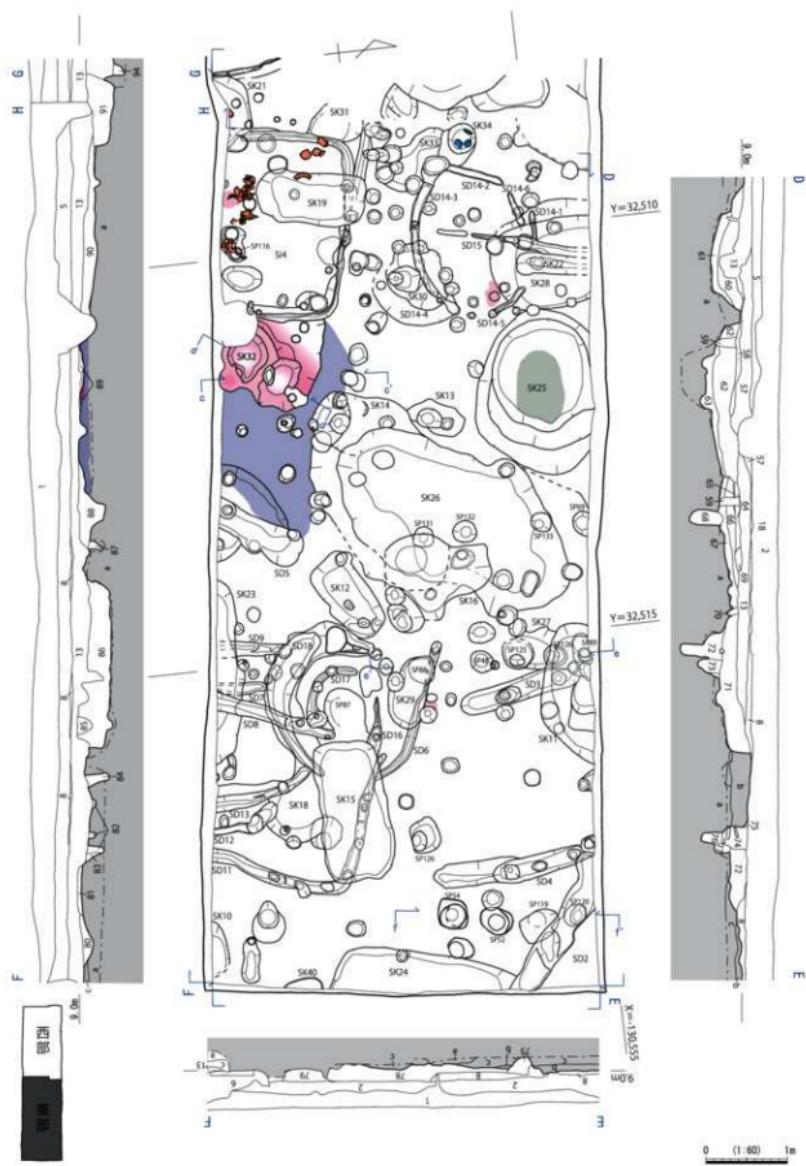


図6 調査区平・断面図（東部）S=1:60

図版3

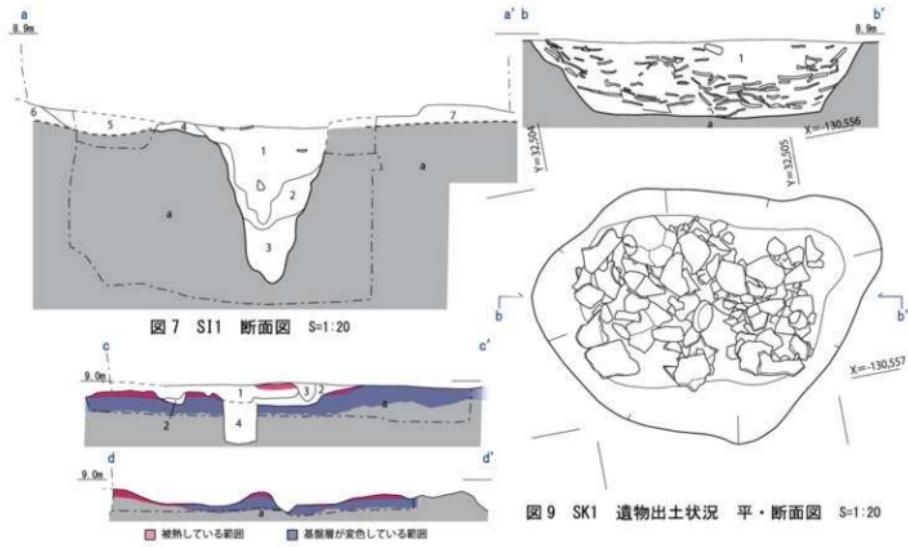


図7 SI1 断面図 S=1:20

図8 SK32 断面図 S=1:20

図9 SK1 遺物出土状況 平・断面図 S=1:20

0 (1-20) 1m

e'

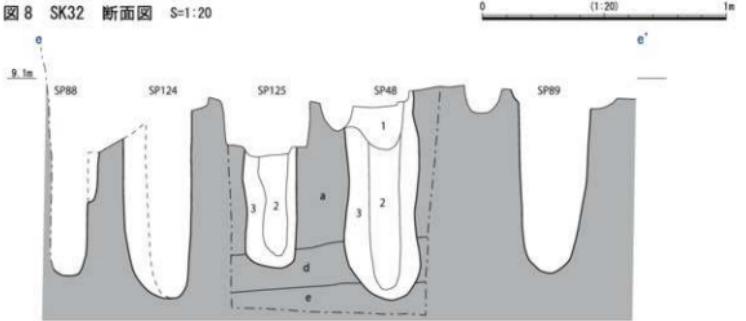


図10 e-e' (SP48、88、89、124、125) 断面図 S=1:20

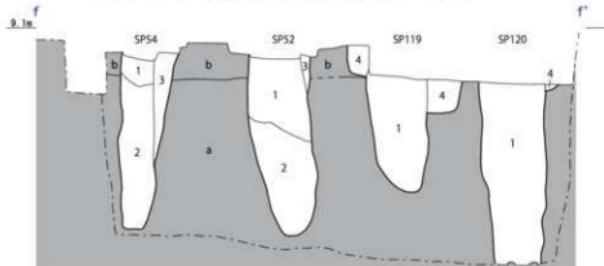


図11 f-f' (SP52、54、119、120) 断面図 S=1:20

図 5、6 註記	
1. 砂石	52. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S13 贊底
2. 盛土	53. 10YR5/8 シルト質粘土 黄灰色土混じる→S13 贊底
3. N4/シルト質土→旧耕土	54. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック少量混じる→SP
4. 10YR4/1 贊土→床土	55. 10YR2/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む
5. N4/細紗砂→細紗→床土	56. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 黄色土ブロック少量、細紗混じる
6. 挖乱土	57. 8 旗がブロック状になつて堆積している
7. 5Y6/1 細紗砂→細紗→旧耕土	58. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む
8. 2. 5Y6/4 シルト 細紗混じる→床土	59. 10YR4/1 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む
9. 2. 5Y6/2 細紗 黑褐色土ブロック混じりシリト→SP	60. 2. 5Y7/6 シルト質粘土 細紗混じる 烧土含む→S28
10. 2. 5Y6/3 シルト 黑褐色土ブロック、細紗混じる→SP	61. 2. 5Y4/2 シルト質粘土 黄褐色土ブロック混じる 灰岩む→S28
11. 5Y6/2 シルト 黑褐色土ブロック、細紗混じる→SP	62. 2. 5Y7/6 シルト 喀斯特地土ブロック、細紗混じる 岩、焼土含む→S25
12. 2. 5Y6/2 シルト 黑褐色土ブロック、細紗混じる→SP	63. 10YR4/2 シルト 細紗混じる 岩、焼土含む→S25
13. 10YR2/1 細紗混じりシリト 床土→黄色土ブロック少量混じる 岩、土多く含む	64. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S26
14. 10YR2/1 贊土 燒土含む→S11	65. 10YR8/6 シルト質粘土 細紗混じる 岩、焼土含む→S26
15. 10YR2/1 贊土 烧土含む→S11	66. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 岩、焼土含む→S26
16. 10YR2/2 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	67. 10YR8/3 シルト質粘土 岩、焼土含む→S26
17. 10YR2/1 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	68. 10YR4/4 シルト質粘土 細紗混じる 岩、焼土含む
18. 10YR2/2 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	69. 10YR7/6 シルト質粘土 灰黄褐色土混じる 烧土含む
19. 10YR2/2 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	70. 10YR5/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S24
20. 10YR2/2 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	71. 2. 5Y3/2 シルト 細紗混じる 岩、焼土含む→S21
21. 10YR2/2 細紗、粘質土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S11	72. 2. 5Y5/3 シルト質粘土→SP9
22. 10YR2/1 贊土 黄色土ブロック混じる 岩、燒土含む→S11 中央土塊 (1 土塊)	73. 2. 5Y7/6 シルト質粘土 灰黄色土ブロック混じる 灰岩む→SP
23. 10YR2/3 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる→S11 周溝	74. 2. 5Y6/2 シルト 細紗混じる→SP
24. 10YR2/2 贊土 大手の黄色土ブロック、細紗混じる→S11 贊底	75. 10YR3/2 シルト質粘土 岩、焼土含む→S22
25. 10YR2/2 贊土 黄色土ブロック、細紗混じる→S11 贊底	76. 2. 5Y7/6 シルト質粘土 烧土含む→S24
26. 10YR7/8 シルト 細紗砂→細紗 硬化→S11 中央土塊 (1 土塊 手土)	77. 10YR7/6 シルト質粘土 喀斯特地土ブロック混じる→S24
27. 10YR2/210YR7/6 細紗質土→S11 贊底	78. 2. 5Y4/3 シルト 黑褐色土ブロック、細紗混じる→S24
28. 10YR7/6 シルト 黑褐色土ブロック混じる 岩、焼土多く含む→S11 贊底	79. 2. 5Y3/4 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S40
29. 土器細片(小) 2. 5Y3/2 細紗質土混じる→S11 中央土塊に伴う施設の堆土	80. 10YR8/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S10
30. 10YR2/2 贊土 (16 層より黄色土ブロックが大きい) →S11	81. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 烧土含む
31. 10YR7/6 シルト 黑褐色土ブロック混じる→S11 贊底	82. 2. 5Y4/2-5/4 シルト 黄色土ブロック、細紗混じる 岩、焼土含む→S11, 12, 13
32. 10YR4/2 細紗質土 烧土含む→S11	83. 2. 5Y6/4 シルト質粘土 岩、焼土含む→S01
33. 10YR2/3 シルト 黑褐色土ブロック混じる→S11 贊底	84. 2. 5Y4/4 シルト 細紗混じる 岩、焼土含む
34. 10YR7/6 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる→S11 贊底	85. 10YR3/2-4/2 シルト質粘土 13 層ブロック混じる 岩、焼土含む→S03
35. 7. 5YR3/2 シルト質粘土 烧土機械に含む→S11 贊底	86. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S03
36. 10YR7/6 シルト質粘土 黑褐色土ブロック混じる→S11 贊底	87. 2. 5Y4/2 シルト質粘土 細紗混じる→SP
37. 10YR3/1 贊土→S11 贊底	88. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック少量混じる 岩、焼土含む→S05
38. 2. 5Y6/4 シルト質粘土→S11 周溝	89. 2. 5Y6/5 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる→S22
39. 10YR5/3 シルト 細紗混じる	90. 2. 5Y4/2 シルト質粘土 細紗混じる 岩、焼土含む→S14
40. 10YR2/1 シルト質粘土 烧土含む	91. 10YR4/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S21
41. 2. 5Y6/5 シルト質粘土 黑褐色土ブロック混じる	92. 2. 5Y4/3 シルト質粘土 黄色土ブロック、細紗混じる 岩、焼土含む→S12
42. 2. 5Y6/2 シルト 細紗混じる	93. 10YR4/3 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 烧土含む→S12
43. 2. 5Y4/2 シルト	94. 2. 5Y4/2 シルト質粘土→S12 周溝
44. 10YR6/4 細紗砂→S03	95. 10YR4/3 シルト質粘土 灰岩む→S12
45. 10YR7/8 シルト質粘土→S11	96. 10YR6/4 シルト質粘土 黑褐色土ブロック混じる→S27
46. 10YR2/1 シルト質粘土 細紗混じる 岩、焼土含む→S03	97. 10YR4/2 シルト質粘土 細紗混じる 烧土含む→S25
47. 10YR5/1 シルト質粘土 黄色土ブロック多量混じる→S03	98. 10YR4/6 シルト質粘土 黑褐色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S03
48. 10YR4/1 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる→S03	99. 2. 5Y3/1 シルト質粘土 細紗混じる 岩、焼土含む→S29
49. 2. 5Y6/5-6/4 シルト質粘土 細紗混じる→床土	100. 2. 5Y3/1 贊土 黄色土ブロック混じる→S29
50. 10YR4/3 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる 岩、焼土含む→S13	101. 2. 5Y4/2 極細紗→細紗 烧土含む
51. 10YR4/2 シルト質粘土 岩、焼土含む→S13 贊底	102. 2. 5Y5/4 シルト質粘土
図 7 註記	
1. 10YR4/2 贊土 黄色土ブロック細紗混じる	5. 10YR4/2 贊土 黄色土ブロック混じる 岩層 =図 5 22 層
2. 2. 5Y7/6 シルト質粘土 細紗	6. 10YR7/8 シルト質粘土→極細紗 硬化 =図 5 26 層
3. 2. 5Y4/1 贊土 黑褐色土ブロック混じる	7. 10YR7/6 シルト 黑褐色土ブロック混じる =図 5 31 層
4. 2. 5Y7/8 シルト	
図 8 註記	
1. 2. 5Y6/6 シルト質粘土 灰黄色土ブロック混じる=図 5 89 層	3. 2. 5Y4/6 シルト質粘土 喀斯特地土ブロック混じる
2. 10YR5/2-4/4 シルト質粘土	4. 10YR4/2 シルト質粘土→上層ビット
図 9 註記	
1. 10YR2/1 贊土 土器大量に含む	3. 10YR4/3 シルト質粘土→上層ビット
図 10 註記	
1. 2. 5Y4/2 シルト質粘土 優、焼土含む	3. 2. 5Y4/6 シルト質粘土 喀斯特地土ブロック混じる
2. 2. 5Y5/3 シルト質粘土	4. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる
図 11 註記	
1. 2. 5Y4/2 シルト質粘土 優、焼土含む	3. 2. 5Y6/6 シルト質粘土
2. 2. 5Y7/2 シルト質粘土ブロック 灰色土ブロック混じる	4. 2. 5Y5/2 シルト質粘土 黄色土ブロック混じる
基礎層註記 図版 5-11 共通	
a. 10YR7/8 シルト質粘土	d. 10YR4/1 砂質土
b. 10YR5/3 シルト質粘土	e. 10YR4/1 砂礫
c. 10YR5/6 シルト質粘土	

表 1 土層断面図註記

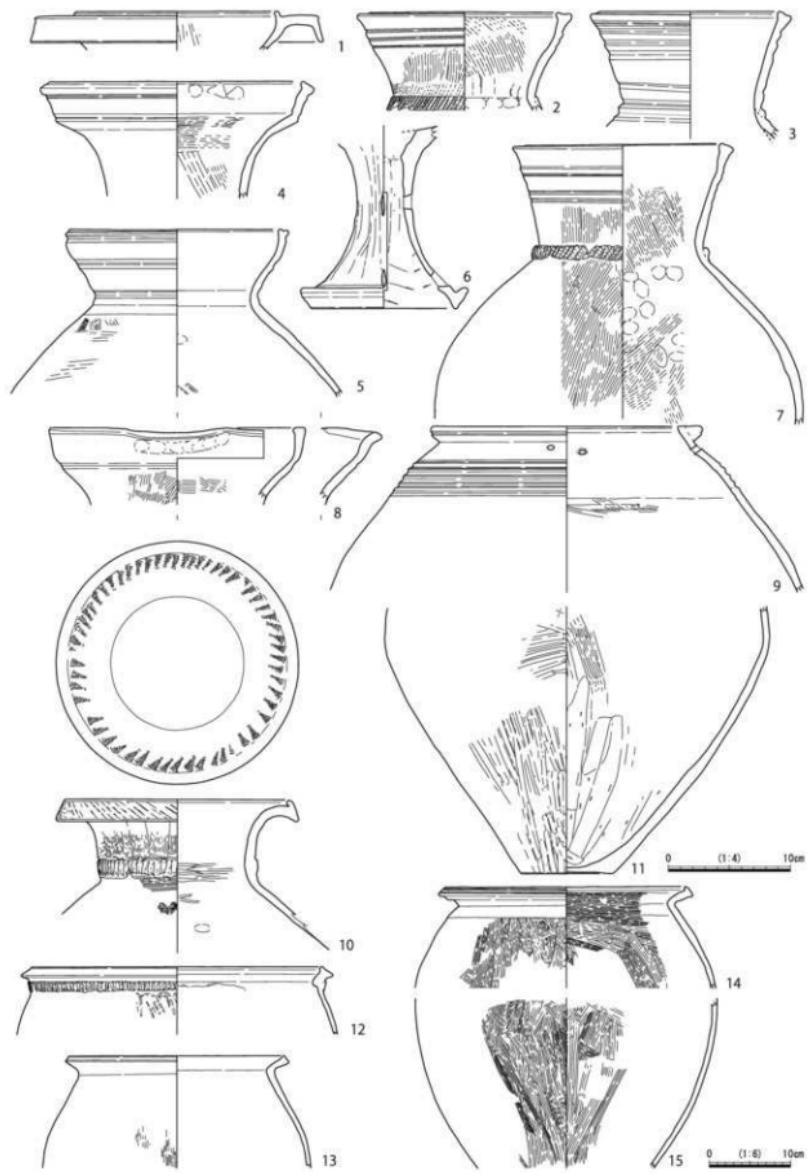


図 12 出土遺物実測図 1 1~11 S=1:4 12~15 S=1:6

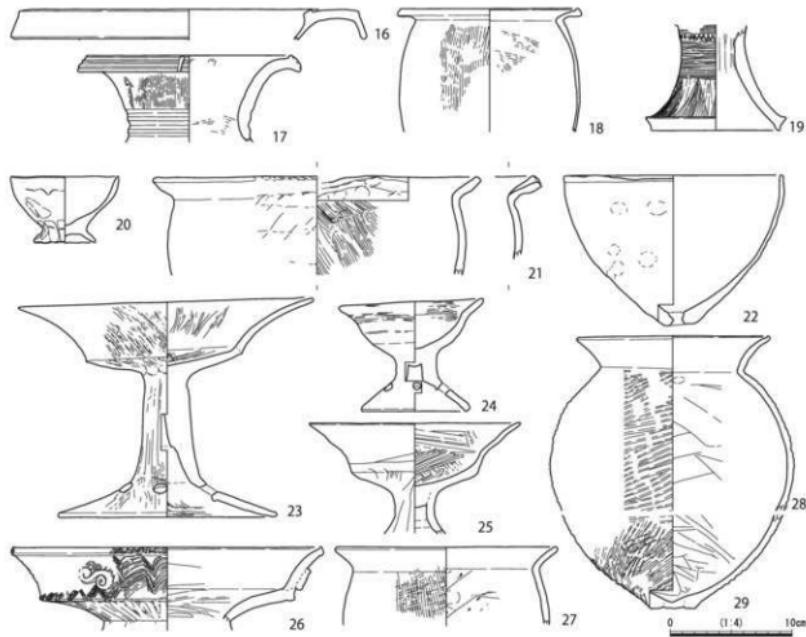


図 13 出土遺物実測図 2 S=1:4

番号	種別	器形	直徑	口径	底形	腹径	脚部形	器高	色調(5)	色調(6)	既存状況	調査(5)	調査(6)
1	弥生土器	水平式蓋付鉢	SK1 (14.2)	-		(3.1) 7.5W6E/3 7.5N6W/3	口縁部1/6		一部被えガラ		王ガホ		
2	弥生土器	直口鉢	SK1 (13.3)	-		(8.0) 10W6E/3 10N6W/3	口縁部1/3		凹縫文・ハケ・列点文・糞点文付突堤		ハケ		
3	弥生土器	直口鉢	SK1 (14.5)	-		(8.4) 9W6E/4 9N6W/2	口縁部3/8		凹縫文		既存不明		
4	弥生土器	受口鉢	SK1 (20.8)	-		(8.0) 7.5W6E/2 10N6W/2	口縁部3/8		凹縫文		ハケ		
5	弥生土器	受口鉢	SK1 (17.2)	-		(13.4) 7.5W6E/4 10N6W/2	口縁部1/1		既存不明		ハケ		
6	弥生土器	高杯	SK1	-		(11.8) 2.5W6E/2 10N6W/2	口縁部1/1		斜縫文・丸井		ナゲズリ		
7	弥生土器	直口鉢	SK1 16.15	(30.2)		(22.6) 7.5W6E/6 7.5N6W/6	口縁部1-瓶頸部3/4、体上部1/4		凹縫文・列点文突堤文		ハケ		
8	弥生土器	受口鉢	SK1 20.8	-		(8.3) 10W6E/1 10N6W/1	口縁部2/3		ハケ・指擦痕(口縁片口部)		ハケ		
9	弥生土器	無縫鉢	SK1 (21.8)	-		(13.8) 10W6E/3 10N6W/3	口縁部1/1		凹縫文		ハケ→ナデ		
10	弥生土器	広口長縫鉢	SK1 18.25	-		(12.3) 2.5W6E/2 10N6W/2	口縁部1/1		斜縫文・指擦痕・突堤文・クシ縫直縫文・波状文・丸井		既存文・丸井		
11	弥生土器	壺	SK1	-	7.6	(21.3) 10W6E/2 2.5N6W/2	瓶頸1/1		王ガホ		ハケ・カズリ		
12	弥生土器	広口短縫鉢	SK1 (35.7)	(39.4)		(8.3) 2.5W6E/7 2.5N6W/7	口縁部1/3		ハケ・瓶形・直縫口・直縫文		既存不明		
13	弥生土器	(水平式蓋付鉢)	SK1 24.2	-		(14.6) 2.5W6E/2 10N6W/2	口縁部1/1		斜縫文・丸井		既存不明		
14	弥生土器	(水平式蓋付鉢)	SK1 29.8	-		2.5W6E/4	7.5W6E/4	口縁部2/3		ハケ	ハケ		
15	弥生土器	壺	SK1 29.8	-		2.5W6E/4	7.5W6E/4	口縁部2/3		ハケ	ハケ		
16	弥生土器	水平式蓋付鉢	SK1 19.5	(25.5)		(2.4) 2.5W6E/9 7.5W6E/4	口縁部1/1		既存不明		種子ガホ		
17	弥生土器	広口長縫鉢	SK1 (16.8)	-		(7.3) 2.5W6E/4 2.5N6W/2	口縁部わざか、瓶頸1/2		凹縫文・複序文・ハケ		既存不明		
18	弥生土器	(水平式蓋付鉢)	SK1 (14.5)	-		(10.1) 2.5W6E/10 10N6W/2	口縁部1/10、瓶頸1/4		ハケ		ハケ		
19	弥生土器	高杯	SK1	-		(10.4) 2.5W6E/4 10N6W/2	瓶頸1/3		王ガホ・直縫文・直縫文		ナデ		
20	古式土器鉢	直口鉢	SK1 8.6	-		(4.8) 5.6 2.5W6E/5 7.5W6E/2	口縁部2/3		ナデ		ナデ		
21	古式土器鉢	大型立口鉢	SK1 (24.8)	-		(8.1) 10W6E/1 5W6E/1	口縁部1/3		ナゲ2回(口縁)		ハケ		
22	古式土器鉢	有孔鉢	SK1 17.8	2.1		12.3 5W6E/4 5W6E/8	1/1		ナデ		ナデ		
23	古式土器鉢	有孔高杯	SK1 24.2	-		17.8 12.9 5W6E/2	10W6E/2	口縁部、瓶頸部を一部欠く	王ガホ(内)・ハケ(内)・瓶立牛(内)		王ガホ(内)・ハケ(内)		
24	古式土器鉢	有孔高杯	SK1 11.9	-		8.9 9.2 7.5W6E/4 2.5N6W/2	2.5W6E/2	口縁部、瓶頸部を一部欠く	王ガホ(内)		王ガホ(内)		
25	古式土器鉢	有孔高杯	SK1 (17.2)	-		(9.0) 7.5W6E/4 2.5N6W/1	2.5W6E/2	口縁部を欠く	ナダ		ナダ		
26	古式土器鉢	二重口鉢	SK1 (25.0)	-		(8.8) 2.5W6E/9 10N6W/2	受底部1/2		波状文・3字状うずき浮文・ハケ・王ガホ		王ガホ		
27	古式土器鉢	ウケ頭高杯	SK1 (17.8)	-		(16.9) 10W6E/2 2.5N6W/2	口縁部2/3・瓶頸1/8		少少ナ・ハケ		ナゲズリ		
28	古式土器鉢	少少手	SK1 15.5	20.05		(21.0) 10W6E/1 10N6W/2	口縁部2/3・瓶頸3/4		少少ナ・ハケ(瓶)		ナナナ(上)・ハケ(下)		
29	古式土器鉢	少少手	SK1 3.8	-		(11.9) 5W6E/4 10N6W/2	瓶頸1/1		少少ナ		ナナナ		

*器種名は、佐友房子・田中元治 2007「三西塙地跡の上野原町」「弥生土器類と墓」(福井県立埋蔵文化財センター)大尉の文字研究会に準拠した。()の数字は、径は復元径、高さは既存値である。

表 2 出土遺物観察表

写真図版 1



調査区全景 西半（東から）



調査区全景 東半（西から）



SI1 IO(いちまる)型中央土坑（南西から）



SD6～13,16～18（北から）



SD3,4 SP48,52,54,88,89,119,120,124,125（南から）



SK32（北西から）



SP48,125 断面（西から）



SP52,54 断面（東から）



SK1 遺物出土状況（南から）



SK32 サンプル採取状況



SK1 出土遺物



SX1 出土遺物



12



21



9



10



28



17



18



19

※番号は実測図に対応する

報告書抄録

ふりがな	とよさわいせきだいななじはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	豊沢遺跡第7次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	小柴 治子、南 憲和							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL(079)252-3950							
発行年月日	平成27年(2015年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
とよさわいせき 豊沢遺跡	兵庫県姫路市 豊沢町23番	28201	20169	34° 82' 26"	134° 68' 87"	2014.3.18 ~ 2014.4.24	105.76 m ²	集合 住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
豊沢遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡、土坑、柱穴	弥生土器、石器		20130590		
		古墳時代	竪穴式建物跡、柱穴	土師器				
中世		柱穴	須恵器、土師器、陶器					

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第25集

豊沢遺跡第7次発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発 行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発 行 日 平成27年(2015年)3月31日

印刷・製本 内海印刷株式会社

〒670-0808 兵庫県姫路市白国5-8-4

